

国際理解教育プログラム 「アジアシリーズ」の実践と効果 児童向けアンケートの結果を中心として

加藤 巖 所員／経済経営学部教授

バンバン・ルディアント 所員／経済経営学部教授

古岡文貴 マレーシア国立サバ大学准教授

片岡義順 川崎市立岡上小学校教諭

— はじめに

2008年度、和光大学は地域貢献事業の一環として、川崎市立岡上小学校（以下、岡上小学校）において児童向けの出前授業を実施した。

4月からは「アジアシリーズ」、同年11月からは「縄文シリーズ」と称する教育プログラムを実施した。このうち「アジアシリーズ」は、アジアの国を毎月一つ取り上げ、大学講師らが児童向けにその国の人々の暮らしや文化を紹介することで、児童の国際理解に資することを目的とした。また、「縄文シリーズ」は、参加児童が（指導を受けながら）縄文時代の住居を組み立てることを通じて、古代の人々の暮らしや文化に興味を持つことを目指していた¹⁾。

本稿は、上記のうち「アジアシリーズ」と銘打った国際理解教育プログラムの実施状況とその効果について論考したものである。とくに「アジアシリーズ」終了後に行った児童向けアンケート調査の結果をまとめて紹介して、同プログラムの教育効果を明らかにする。同様の教育プログラムを実施する方々への基礎資料になればと願っている。

1) この教育プログラムは実践的な歴史教育といえるかもしれない。岡上小学校の校地からは多くの遺跡が発掘されており、以前から歴史教育に力を注いでいる。住居の組み立て指導は和光大学の関根秀樹（非常勤講師）が担当している。住居の材料は、岡上小学校の裏山から伐り出した木や竹を利用しており、児童に近隣の自然環境を考える機会を提供しているという見方もできるかもしれない。

「アジアシリーズ」の実施日程は以下のとおりである。

- 2008年4月24日 マレーシア編（マレーシア人研究生・和光大学教授）²⁾
- 2008年5月29日 スリランカ編（スリランカ人留学生・和光大学教授）
- 2008年6月27日 ベトナム編（ベトナム人留学生・ベトナム駐在元金融マン・和光大学教授）
- 2008年7月9日 インドネシア編（インドネシア人・和光大学教授）
- 2008年9月10日 ネパール編（ネパール民族舞踊専門家・ネパール人調理師・和光大学教授）

毎回の授業はつぎのようなスタイルで行われた。まず、写真やビデオなどの映像資料も使って当該国の暮らしや文化を紹介した。その後、小学校の調理実習室を利用して、その国の代表的な料理を児童と共に作り試食している。講師陣には外部の方も含めて当該国の出身者を入れるようにした³⁾。

暮らしや文化の紹介ではさまざまな工夫を凝らし、授業を聞いている児童が当該国をできるだけ身近に感じられるよう試みた。当該国の民族衣装を身に付けて伝統舞踊を披露し児童と共に踊ったり、その国出身の調理師に来てもらい郷土料理を紹介してもらったりといったことを行った。それぞれの詳細については、岡上小学校の片岡義順教諭の論考をご覧ください。

岡上小学校と和光大学の間で、こうした連携授業が始まった発端は、2007年春に岡上小学校から和光大学に対して英語授業への外国人講師の派遣依頼が来たことにある。依頼を受けた和光大学大学開放センターでは検討の結果、和光大学に勤務する米国人講師を3度にわたり派遣した。その後、双方の代表が討議を重ねた結果、岡上小学校の進める国際理解教育のためにお互いが広く協力するといった合意が生まれ、2008年春からは上記のような教育プログラムが始まったのである。

小さなきっかけから始まった国際理解教育プログラムの取り組みを多くの方に知っていただくと同時に、本稿を通じて、小学校と大学という、教育課程の異なる段階にある2つの学校が連携して授業を行うことの意義や可能性について考えていただく契機になればと願っている⁴⁾。

2) 予定していたマレーシア人研究生のビザ取得が遅れ、当該研究生は出席できなかった。代わりに2008年3月にマレーシア・ボルネオ島を訪れた和光大学の学生グループが参加し、自らの体験談を児童に語った。

3) 毎回の授業には和光大学の学生も参加した。彼らのうちの多くは、その日に取り上げる国への短期留学やフィールドワークを経験していた。また、慶応大学の学生が参加した回もあった。

4) 出前授業を担当した和光大学の教員と本稿を執筆する地域開発モデル研究会のメンバーは一部が重複している（バンバン・ルディアントと加藤巖）。とくに加藤巖は大学開放センター長も務めており、岡上小学校との連携授業には2007年から関わっている。

1—— 調査概要

「アジアシリーズ」終了後に、授業評価アンケート調査を行った。調査の実施は、和光大学総合文化研究所の研究プロジェクト『人的資源の活用に基づく地域開発モデルをアジア各国で探る』（以下、地域開発モデル研究会と略称する）が岡上小学校の協力を得て行った。調査期間は、2008年9月11日から2008年9月18日であった。その後、回答の取りまとめと分析に約1ヶ月を要した。

調査対象者は、「アジアシリーズ」を受講した岡上小学校の6年生2クラスの48名である。地域開発モデル研究会が作成したアンケート調査票は事前に岡上小学校においてチェックをしてもらい、その上で片岡義順教諭ら学級担任の手によって児童へ配布された。

児童に対しては、個人情報保護の観点から氏名などを回答しないように、また、答えたくないものには回答する必要がない旨を伝えた。結果として46通の回答を得た⁵⁾。そこで、配布したアンケート調査票48通の内、回収されたものは46通（有効回答46通）であった。したがって、回収率は95.8%となった。

配布したアンケート調査票の表題は『岡上小学校と和光大学の連携授業を充実させるためのアンケート』であり、属性3項目、質問26項目についての無記名アンケート方式であった。回答の選択肢数が全部で100超とやや小学生児童にとっては多かったものと思われる。調査票はA3版見開き1ページ全体にわたっている。

本稿では、データに統計的処理を加え、独自に幾つかの傾向を汲み上げ、解説している。したがって、本報告の内容に関する責任は調査実施主体である地域開発モデル研究会が負うものである。今回のアンケート調査に関わる地域開発モデル研究会メンバーは、和光大学総合文化研究所所員である加藤巖、バンバン・ルディアントおよびマレーシア国立サバ大学の古岡文隆である。

2—— 回答者の基本属性について

(1) 学年・性別・出席

アンケート調査の回答者は46人で全員が小学校6年生である。回答者の内訳は「男子」23人、「女子」23人と男女が同数であり、回答者の性比（女性に対する男性の割合）は100である⁶⁾。

5) 調査日に2名の児童が欠席していた。

6) 川崎市総合企画局都市経営部統計情報課によると、同市の10歳～14歳の年齢層では性比が106.3となっており男子の方が多い（2007年10月1日現在）。全年齢層で見ても川崎市では64歳以下の年齢層で性比が100を上回り、女性に対して男性が多くなっている。ただし、地区によるバラツキが見られ、麻生区だけは例外的に女性の数が男性を上回っている（麻生区の性比は97.9）。以下のHPを参照。
<http://www.city.kawasaki.jp/20/20tokei/home/nenbetu/nb1910/seihi.htm>

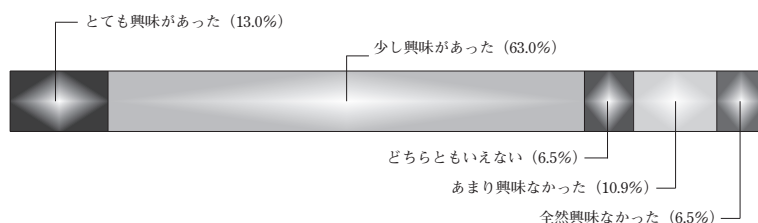
全5回の「アジアシリーズ」への出席に関しては、回答者のうち44人がすべての回へ出席している（男子2名が4回の出席）。したがって、回答者の「アジアシリーズ」への出席率は99.1%となっている。

(2) 外国の文化や外国語への興味

「アジアシリーズ」を受講する前に「外国の文化や外国語への興味」をどの程度持っていたのかを尋ねたところ、児童のうち13.0%が「とても興味があった」、同じく63.0%が「少し興味があった」と回答している。すなわち全体の76.0%が「外国の文化や外国語への興味」を持っていたと回答している。

一方、関心の度合い順にそれ以降の回答を並べると、「どちらともいえない」6.5%、「あまり興味なかった」10.9%、「全然興味なかった」6.5%となっている。ここから全体の4分の1程度は外国の文化や外国語に対して興味が薄かったと分かる。

図表1. 外国の文化や外国語への興味（受講前）

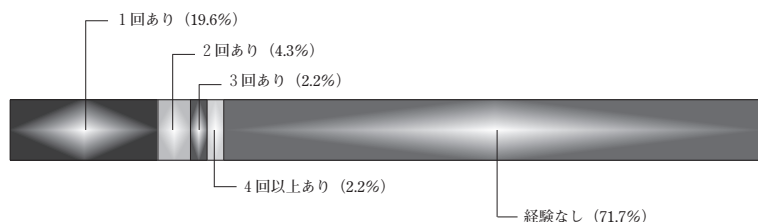


この設問に対する回答では男女差が見られ、おおむね女子の方が「外国の文化や外国語への興味」の度合いが高いことを示している。また、「アジアシリーズ」受講後に「外国の文化や外国語への興味」が増したかどうかを問うたところ、全体として肯定的な回答が多くなっている。とくに受講後の興味の度合いの伸び具合も女子の方が高くなっている。これらの詳細については後述する。

(3) 海外旅行の経験

海外旅行の経験は28.3%の児童が持っている。このうちの約半数が渡航先とし

図表2. 海外旅行の経験



て「北米（ハワイ含む）」と「アジア」の両方を選択している。したがって、おおよそ回答者の3割程度が海外旅行の経験者で、そのうちの約3分の1が複数回の渡航歴を持っている。

(4) 外国のことを知る方法

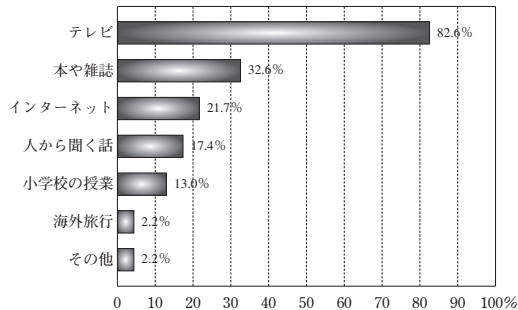
「外国のことを知る方法」は回答総数が79個（1人2つまで選択できる複数回答）だった。

最多回答率は「テレビ」で82.6%（男女同率）である。つづいて回答率の高い順に「本や雑誌」が32.6%（男子34.8%、女子30.4%）、「インターネット」が21.7%（男女同率）、「人から聞く話」が17.4%（男女同率）、「小学校の授業」が13.0%（男8.7%、女17.4%）、「海外旅行」が2.2%などとなっている。

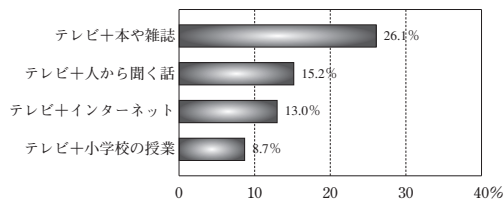
実は、事前の予測では「インターネット」が多勢を占めるだろうとしていたが、その予測は当たらなかった。先述のように回答した児童の8割が「外国のことを知る方法」として「テレビ」と答えている。児童にとって情報源としてのテレビはまだまだ圧倒的な存在感を持っていることがうかがえる。その一方で「インターネット」を選択したのは約2割であった。「本や雑誌から」と答えた児童が3割超だったことから、児童の情報収集の手段はテレビが主役で、それを除くと「インターネット」よりも「印刷された文字情報」の方が多く分かる。

また、回答の組み合わせで最も多かったのも「テレビ」と「本や雑誌」の組み合わせだった。図表4にあるように、回答者数中の26.1%がこの組み合わせを選んでいる。つまり児童の4人に1人が選んでいる⁷⁾。同じく、「テレビ」と「人から聞く話」の組み合わせを選んだのは回答者中の15.2%、「テレビ」と「インターネット」の組み合わせ

図表3 外国のことを知る方法（複数回答・回答率）



図表4 外国のことを知る方法（情報源）の組み合わせ（テレビとの組み合わせ）



7) 「本や雑誌」を選んだ児童の8割が「テレビ」も同時に選んでいる。

を選んだのは回答者中の13.0%であった。ここでは、単独では回答率の低い「人から聞く話」が「テレビ」と組み合わせることで、(単独での回答率がより高い)「インターネット」を上回っている。

「テレビ」と「インターネット」を組み合わせた回答率が比較的低いことから、児童にとって「テレビ」と「インターネット」の両者の関係は(他に比べて)代替的なものと推測できる。ただし、今後、パソコン普及率がさらに高まって「家庭に1台のパソコン」から「家族それぞれが個人所有」をするようになり、同時にインターネットとテレビの融合が進めば、「外国のことを知る」情報源としてのインターネットの相対的地位は高まっていくとも推測される。こうした予測が正しいならば、今後は国際理解教育プログラムの実践はインターネット上での展開を視野に入れたものを工夫する必要があるだろう。

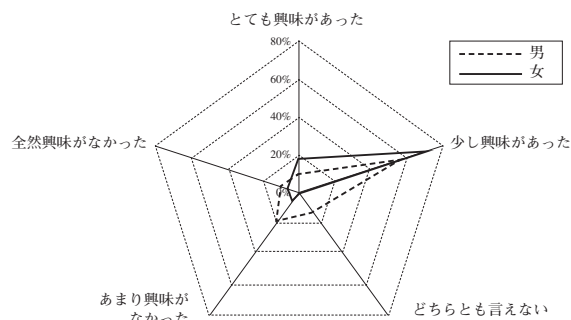
3—「アジアシリーズ」受講後の児童の意識変化

(1) 以前よりも外国の暮らしや文化に興味を持つようになりましたか

「アジアシリーズ」の受講後に「以前よりも外国の暮らしや文化に興味を持つようになったか」を尋ねたところ、「とても興味をもつようになった」が34.8% (男子21.7%、女子47.8%)、「(以前より)興味を持つようになった」が60.9% (男子69.6%、女子52.2%)、「変化なし」が4.3% (男子のみ)、「(かえて)興味を少し失った」と「興味をとて失った」はともに0%となっている。

上記のように、回答者の95.7%が「アジアシリーズ」を受講することで、外国の暮らしや文化への興味が増したと答えている。中でも女子児童の感じる興味の高まりが顕著となっている。このことは、図表5と図表6を比較してみるとより鮮明となる。図表5では、「アジアシリーズ」を受講する前に、外国の文化や外国語にどの程度の興味があったかを尋ねている。一方、図表6では「アジアシリーズ」を受講して、以前よりも外国の暮らしや文化に興味を持つようになったかどうかを聞いている。2つの図表から男女とも、受講後にはレーダーチャート上の三角形が興味の度合いが高いことを示す垂直方向へ伸びていることが分かる。とくに女子の伸びが大きいこ

図表5 「アジアシリーズ」を受講する前に、外国の文化や外国語に興味がありましたか



とが見て取れる。

この設問の回答でもう一つ特徴的な点は、受講前に外国の文化への関心が高かったグループの方が、そうでないグループよりも受講後の興味の度合いの伸びが大きいことである。

例えば、「アジアシリーズ」の受講前から「外国の文化や外国語

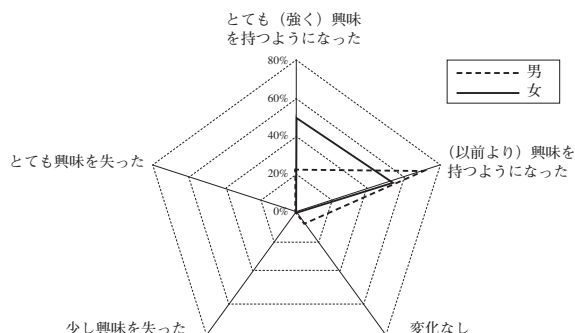
にとっても興味のあった」グループでは、その8割超が受講後に「とても強く興味をもつようになった」と回答している。一方、受講前に「少し興味があった」グループ、興味があるともないとも「どちらともいえない」グループ、「全然興味がなかった」グループでは受講後に「とても強く興味をもつようになった」と回答しているのはそれぞれ3割ほどである。また、受講前に「外国の文化や外国語にあまり興味がなかった」グループでは、受講後に「とても強く興味をもつようになった」と回答しているものはゼロである。さらに、「全然興味がなかった」グループでは受講後に「変化なし」との回答も3割ほどある。

そこで、「アジアシリーズ」は児童の外国の文化や暮らしへの興味・関心を全体的に底上げすると同時に、もともと外国の文化などへ関心の高かった受講者の好奇心へさらなる刺激を与えるものだったといえるだろう。

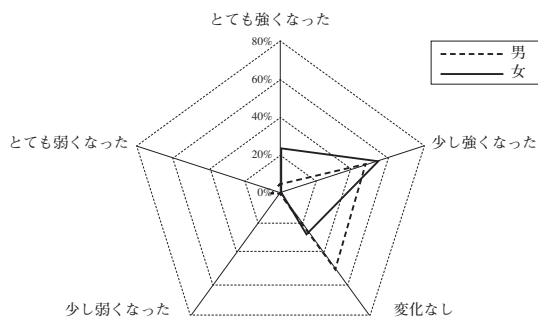
(2) 外国語を勉強しようと思う気持ちが強くなりましたか

「アジアシリーズ」受講後に「外国語を勉強しようと思う気持ちが強くなったか」との問に対しては、「とても強くなった」との回答が13.0%（男子4.3%、女子21.7%）、「少し強くなった」が47.8%（男子43.5%、女子52.2%）、「変化なし」が37.0%（男子47.8%、女子26.1%）、

図表6 「アジアシリーズ」を受講して、以前よりも外国の暮らしや文化に興味をもちようになりましたか



図表7 「アジアシリーズ」を受講後に、外国語を勉強しようと思う気持ちが強くなりましたか



「少し弱くなった」が0%、「とても弱くなった」が2.2%（男子のみ）であった。

図表7でも明示されるとおり、この設問に対する回答でも女子の方がよりポジティブな回答をしている。

(3) 自分で調べ学習をしようと思いましたか

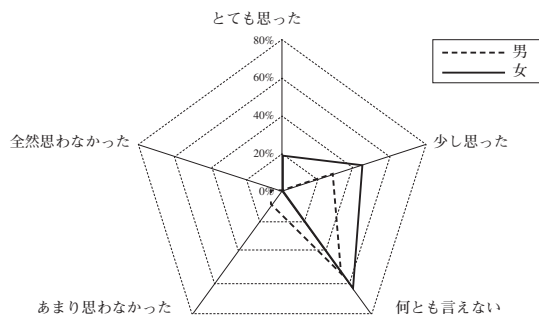
「アジアシリーズ」を受講してみて「自分で調べ学習をしようと思ったか」との間に対しては、「とても強く思った」との回答が8.7%（女子のみ）、「少し思った」が37.0%（男子30.4%、女子43.5%）、「何ともいえない」が47.8%（男子56.5%、女子39.1%）、「あまり思わなかった」が4.3%（男子のみ）、「全然思わなかった」が2.2%（男子のみ）であった。

この設問に対する回答でもやはり女子の方がよりポジティブな回答をしている。ただし、他のものに比較すると、この回答は低調（消極的）といわざるを得ない。図表8でもレーダーチャート上では消極性を示す下向き加減の台形が描かれている。こうしたことは、先にあった「外国のことを知る方法」の最大回答が「テレビ」であることと若干の関係があるのかもしれない。多くの情報提供型のテレビ番組は、それ自体が自己完結型となっている。つまり、事の顛末をすべて見せて視聴者が疑問を差し挟む余地のないままに終わってしまうので、番組終了後からの発展性に欠ける構成となっている。また、情報過多の昨今ではメディア情報の使い捨てやその場限りの娯楽性といった側面が強く押し出されてもいる。こうしたことに慣らされている場合には、情報の受け手が自らの裁量で自己の関心や興味を膨らませていくことに疎くなる可能性が指摘できるだろう。

また一方では、一部の識者が指摘するように日本の学校では知識を詰め込むことが主要な「勉強」で、そこでは自ら考える訓練に欠ける⁸⁾といったことや、放課後の塾や習い事で時間が取られて他のことをする余裕が子どもたちに与えられていない⁹⁾といったことの影響があるかもしれない。

上記の回答傾向がでてきたことを鑑みて、

図表8 「アジアシリーズ」を受講して、自分で「調べ学習」をしようと思いましたか



8) Alex Kerr, *Dogs and Demons: The fall of modern Japan*, Penguin Books 2001 pp.295-296.

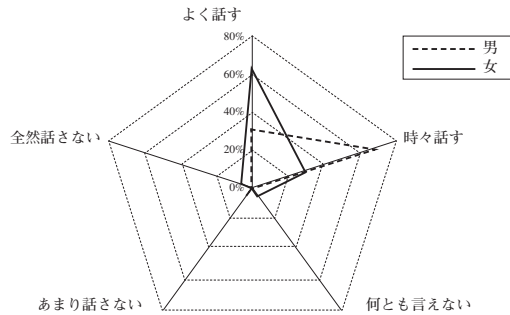
9) *Ibid.*, pp.296-299.

今後は大学からの出前講義では、子どもたちが自らの学習で知識を広げ、対象に対する学びの発展を手助けするような工夫をしていくことが望ましいといえるだろう。

(4) 「アジアシリーズ」のことを家族や友人と話しますか

この設問に対する回答はおおむね前向きなものとなっている。すなわち、「よく話す」が45.7%、「時々話す」が47.8%であり、全体の93.5%が多かれ少なかれ「「アジアシリーズ」のことを家族や友人と話す」と回答している。とくに女子の60.9%が「よく話す」と回答している。この回答でも女子の方が積極的という結果が見えている。

図表9 「アジアシリーズ」のことを家族や友人と話しますか



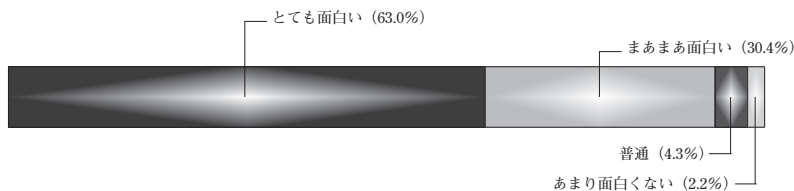
4—「アジアシリーズ」への児童の評価

(1) 「アジアシリーズ」全般の感想

「アジアシリーズ」が5回目を終了した後に「アジアシリーズ」の感想を尋ねたところ、「とても面白い」が63.0%、「まあまあ面白い」が30.4%、「普通」が4.3%、「あまり面白くない」が2.2%であった。

おおむね好意的な回答となっている。中でも女子の78.3%が「とても面白い」と回答を寄せている。そして、残りの女子の全員も「まあまあ面白い」と回答している。これは女子の21.7%に相当している。

図表10 「アジアシリーズ」の感想



逆に「まったく面白くない」との回答はゼロだった。これに関しては、回答者である児童が大学のアンケート調査に対して自己抑制を効かせたことから来ているのかもしれない。少なくとも出前講義実施者への遠慮もあるだろうし、若干の偏向があることは意識する必要があるだろう。

(2) 「アジアシリーズ」で面白いと感じたもの

「アジアシリーズ」で面白いと感じたものを1番から5番まで選んでもらった回答は図表11のとおりである（回答数を示している）。

児童のうち25人が「調理実習」を1番面白いと選択しており、この中から2番目に面白いと「先生の話」を選んだのが10人、「写真」を選んだのが1人、「ビデオ」を選んだのが11人、「その他」を選んだのが2人、「無回答」が1人であった。

ついで児童のうち14人が「先生の話」を1番面白いと選択しており、この中から2番目に面白いと「調理実習」を選んだのが9人、「写真」を選んだのが2人、「ビデオ」を選んだのが2人、「その他」を選んだのが1人であった。

そこで、1番から4番目までの連続する選択で最も多かった（7人）のは、1番「調理実習」、2番「ビデオ」、3番「写真」、4番「先生の話」の組み合わせであった。つぎに多かったのは、1番「調理実習」、2番「先生の話」、3番「ビデオ」、4番「写真」の組み合わせ（4人）と、1番「先生の話」、2番「調理実習」、3番「写真」、4番「ビデオ」の組み合わせ（4人）である。

上記のような一次集計からは、児童の人气が「調理実習」と「先生の話」に比較的集まっている様子がうかがえる。一方、「児童の外国文化への関心度合い」と「児童が面白いと感じたもの」の相関につきクロス集計したところ、以下のよう結果がでた。

すなわち、「(元々)外国に興味があった児童(とても興味があった児童と少し興味があった児童の合計)」のうち、「調理実習」が1番面白いと回答した児童は54.3%、以下、「先生の話」28.6%、「ビデオ」11.4%、「その他」5.7%となっている。同じく「以前よりも外国に興味を持つようになった児童(とてもと少しの回答者合計)」のうち、「調理実習」が1番面白いと回答した児童は54.5%、以下、「先生の話」31.8%、「ビデオ」6.8%、「その他」6.8%となっている。このクロス集計では、これら2グループに関してほぼ似通った回答率になっている。ただし、「以前よりも外国に興味を持つようになった児童」の方がより「先生の話」を愛好する傾向が見られる。これは「アジアシリーズ」によって外国への興味がわいてきて、先生の話に熱心に聞くようになったのか、逆に先生の話面白と感じることで、外国への興味を強めていったのか、両方の側面から解釈を加えることができる。

また、「調べ学習をしようと思った児童(とてもと少しの回答者合計)」のうち、「調理実習」が1番面白いと回答した児童は66.7%、以下、「先生の話」23.8%、

図表11 「アジアシリーズ」で面白かったもの

1番面白い	2番目に面白い	3番目に面白い	4番目に面白い	5番目に面白い
調理実習 (25人)	先生の話 (10人)	写真 (3人)	ビデオ (3人)	その他 (1人) 無回答 (2人)
		ビデオ (6人)	写真 (4人)	無回答 (4人)
			その他 (2人)	写真 (2人)
		その他 (1人)	ビデオ (1人)	写真 (1人)
	写真 (1人)	ビデオ (1人)	先生の話 (1人)	無回答 (1人)
	ビデオ (11人)	写真 (9人)	先生の話 (7人)	その他 (2人) 無回答 (5人)
				その他 (2人)
		先生の話 (2人)	写真 (2人)	その他 (2人)
	その他 (2人)	先生の話 (1人) ビデオ (1人)	写真 (1人) 写真 (1人)	ビデオ (1人) 先生の話 (1人)
	無回答 (1人)	無回答 (1人)	写真 (1人)	無回答 (1人)
先生の話 (14人)	調理実習 (9人)	写真 (5人)	ビデオ (4人)	その他 (1人) 無回答 (3人)
			無回答 (1人)	無回答 (1人)
		ビデオ (2人)	写真 (2人)	無回答 (2人)
		無回答 (1人)	無回答 (1人)	無回答 (1人)
	写真 (2人)	その他 (1人)	ビデオ (1人)	写真 (1人)
		調理実習 (1人)	調理実習 (1人)	その他 (1人)
		ビデオ (1人)	ビデオ (1人)	無回答 (1人)
		ビデオ (2人)	写真 (2人)	調理実習 (2人)
その他 (1人)	ビデオ (1人)	写真 (1人)	調理実習 (1人)	
ビデオ (4人)	調理実習 (2人)	先生の話 (1人)	写真 (1人)	無回答 (1人)
	先生の話 (1人)	写真 (1人)	先生の話 (1人)	無回答 (1人)
	写真 (1人)	調理実習 (1人)	先生の話 (1人)	無回答 (1人)
その他 (3人)	先生の話 (2人)	ビデオ (2人)	調理実習 (2人)	写真 (2人)
	ビデオ (1人)	調理実習 (1人)	先生の話 (1人)	写真 (1人)

図表12 外国（文化）への関心度合と児童が面白いと感じたもの相関

	調理実習	先生の話	ビデオ	その他
(元々) 外国に興味があった児童が1番面白いと選んだもの	54.3%	28.6%	11.4%	5.7%
(以前よりも) 外国に興味を持つようになった児童が1番面白いと選んだもの	54.5%	31.8%	6.8%	6.8%
調べ学習をしようと思った児童が1番面白いと選んだもの	66.7%	23.8%	9.5%	0.0%

「ビデオ」9.5%となっている。先の2グループに比して、「調理実習」への選好が強くなっている。これは、実際にアジア各国の料理を作って味見をするという体験を通じて、関連する事柄を自習してみようと考えた児童がいたことの証左であろう。換言すると、実践的な教育プログラムに刺激を受けて、(一部の児童の中に)調べ学習の機運が高まったということであろう。

5— 個別の事柄への児童の評価

(1) 先生の話し方およびその時間

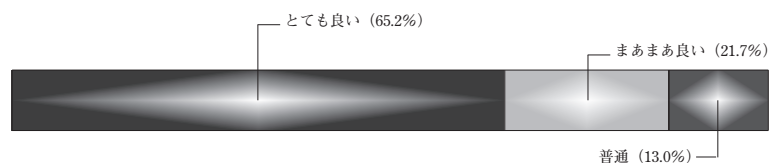
「先生の話し方」に関しては概ね好評であった。児童のうち65.2%が「とても良い」、21.7%が「まあまあ良い」と回答している。つまり全体の86.9%が「先生の話し方」については肯定的な評価をしている。残りの13%の児童も「普通」の評価を与えており、否定的な評価は一切なかった。

ただし、この設問に関しては、児童が(気をまわして)回答の中身を上方へ修正した可能性は否定できない。ある程度、これらの回答には上方へのバイアスがかかっていることを認識すべきであろう。

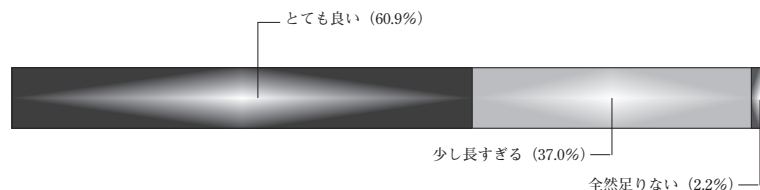
ついで「先生の話し時間」に関しては、「とても良い(=時間は適切)」との回答が全体の60.9%を占めている。この一方で、「少し長すぎる」と感じる児童が37.0%いた。

毎回の模擬授業では、前半の約30分～40分を講義(先生の話)として各国の地理・歴史、そして庶民の暮らしなどの紹介にあてていた。こうした小学校の1コ

図表13 先生の話し方への評価



図表14 先生の話し時間への評価



マ分を座学に費やした後に調理実習を行っていた。そこで、実習で生き生きと動きまわるまでの（前半の）座学の時間は、一部の児童にとってはやや長すぎるように感じられたものと推測できる。

(2) 写真や映像（ビデオ）の中身およびその分量

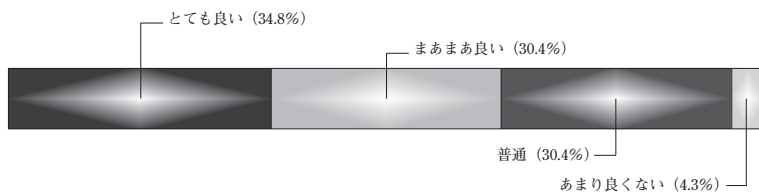
写真や映像（ビデオ）に関する評価は、おおよそ三分割されている。「とても良い」が34.8%、「まあまあ良い」が30.4%、「普通」が30.4%となっている。先にも触れたように、児童の評価は上方へぶれている可能性が否定できないので、「普通」および「あまり良くない」が合計で全体の34.7%を占めるということ（図表15参照）は、写真や映像に関する評価は決して高くないと認識すべきであろう。

映像機器の扱い方や部屋の照明など付帯的な事柄も含めて、写真や映像の見せ方にはさらなる工夫が必要と思われる。とくに児童の情報収集手段は「テレビ」が中心となっているだけに、テレビ番組の巧みな演出に対抗するような仕掛けが求められるといえよう。

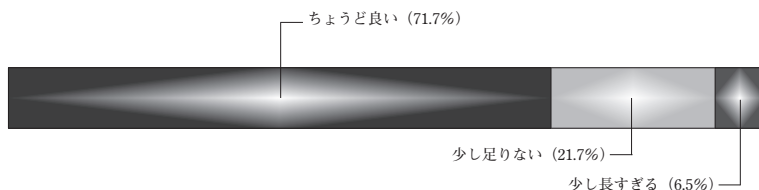
写真や映像の分量に関しては「ちょうど良い」が71.7%、「少し足りない」が21.7%、「少し多すぎる」が6.5%の回答率であった。実はこの設問の回答は事前の予測と大きく異なっていた。

講師側としては写真や映像の分量が十分ではなかったのではないかという思いが強かったので、児童からの「少し足りない」という回答が多数を占めることも想定していた。ところが、「ちょうど良い」が7割を超える回答となったことから、

図表15 写真や映像（ビデオ）への評価



図表16 写真や映像（ビデオ）の分量



以下のことを考えている。

まず、前述のように、写真や映像の中身に関しては評価が決して高いとはいえない。これはあくまでも（分量ではなく）写真や映像の質に一部児童の不満が募ったと考えられる。テレビなどでCGグラフィックスを見慣れたものにとっては、写真と映像の総量よりも個々の刺激度が高い方が望ましいと感じられるのかもしれない。このことは、先に述べた“テレビ番組の巧みな演出に対抗するような仕掛け”が求められる所以だが、大学講師が用意する（動きのない）写真やごく平凡な映像でもってテレビに戦いを挑むには、対象物への深い掘り下げが必要とされよう。すなわち、写真一枚毎、映像毎の詳しく興味深い解説を行い、児童の耳目を集めるよう心掛けねばならない。つつい講師は手持ちの写真や映像を全て見せたい誘惑に駆られるが、児童へ見せるものは厳選し、かつ、そのそれぞれに對してじっくりと話しこんでいく事が肝要であろう。

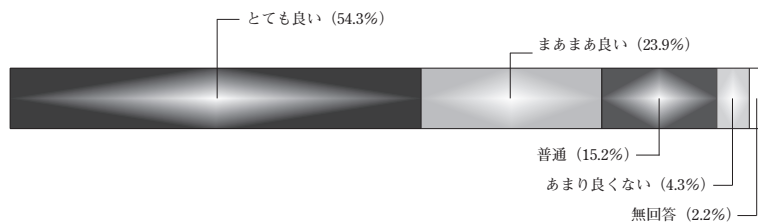
(3) 調理実習およびその時間

調理実習に対しては、全体の54.3%が「とても良い」、同じく23.9%が「まあまあ良い」と回答している。両者の合計は78.2%に達している。

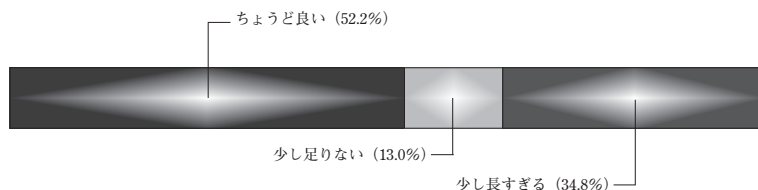
一方で、「普通」が15.2%、「あまり良くない」が4.3%、「無回答」も2.2%存在している。

調理実習の時間に関しては、全体の52.2%が「ちょうど良い」としているが、34.8%が「少し長すぎる」との回答をしている。

図表17 調理実習への評価



図表18 調理実習の時間



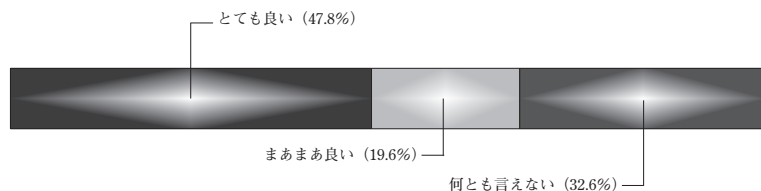
確かに調理実習は大勢の児童に指示を与えながらの作業であり、予定の時間を超過しがちであった。また、調理後の試食、そして食器洗いなどの後片付けもあって全体の時間は想定以上に長くなっていったように思う。本稿の終りに児童が自由記述欄に書いた要望などを記しているが、そこでも「時間のかかる調理は下準備をしておいてほしい」といったものがある。講師側が今後は十分に配慮すべき問題を指摘してもらったといえる。

(4) 大学生が小学校へやって来ることについて

大学生が小学校へやって来て（出前）授業に参加することについて訊いたところ、「とても良い」が47.8%、「まあまあ良い」が19.6%で、両者の合計は67.4%の回答率となっている。

「何とも言えない（＝可もなく不可もなく）」といった回答も32.6%に達している。こちらの回答者は（大学生の来学を）決して否定しているわけではないが、さりとて「大学生が小学校へやって来ること」を肯定的に認めているわけでもない。児童自身が評価することに戸惑いを感じているのかもしれない。

図表19 大学生が小学校へやってくること

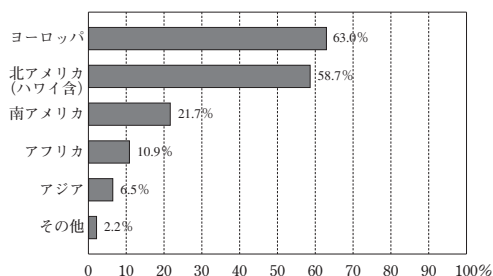


6——児童からの要望・希望

(1) 今後、話を聞いてみたい地域と国

アジアに限らず、今後、話を聞いてみたい地域と国を尋ねたところ、多くの児童がヨーロッパと北アメリカ（ハワイを含む）を選択している（1人2個までの複数回答）。それぞれの回答率をみると、ヨーロッパが63.0%、北アメリカが58.7%、南アメリカが21.7%、アジアが6.5%、その

図表20 今後、話を聞いてみたい地域
(複数回答・回答率)



他が2.2%となっている¹⁰⁾。

この設問に対する回答内でクロス集計を行うと、ヨーロッパに関心のある児童のうち約半数は北アメリカにも関心がある（話を聞いてみたい）ことがわかる。

具体的な国名で見ると、ヨーロッパでは圧倒的にイタリアとフランスが人気である。この2カ国に続くのがイギリスとドイツだが、回答率で上位2カ国との間に3倍以上の開きをつけられている。北米では、アメリカ合衆国が17.4%の回答率で単独トップとなっている。南米に目を向けるとブラジル、アルゼンチン、ペルー、チリの名前が挙がっている。また、アジアでは回答率は低いながらもインドと中国が第1位と2位になっている。

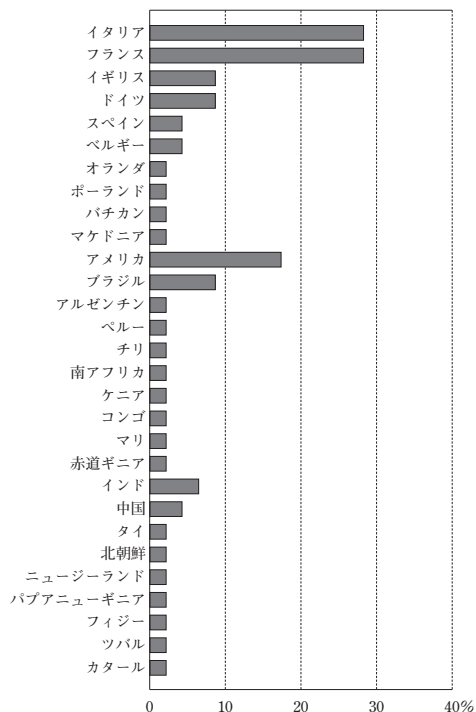
児童の関心は様々な国へ広がりを見せているが、欧米諸国に関しては、サッカーワールドカップの常連国が名を連ねている。スポーツの国際大会やその他の国際的な催しへの出場での露出度が高いこと、かつ、社会科などの授業で頻出することから児童の関心と呼んでいる側面があるのかもしれない。

(2) 今後、話を聞いてみたい事柄

国際理解教育に関連して「今後、話を聞いてみたい事柄」を尋ねた質問では、児童の回答は実に様々であった（自由記述・複数回答可）¹¹⁾。ここでは細かい差異を目をつぶり、児童の回答を大別してみた。結果は図表22のとおりである。

回答内容は、「アジアシリーズ」の趣旨に沿った回答を児童がしたのか、「文化」

図表21 今後、話を聞いてみたい国
(複数回答・回答率)



10) 「アジアシリーズ」が終了した時点でアンケートを実施しているため、児童の中に（次回の出前授業では）他の地域の話を知りたいという誘引が働いたことが考えられる。

11) この設問に対する回答総数は56個であった。

と「食べ物」の関心が飛びぬけて高く、以下、大きく差を付けられる形で「サッカーを中心としたスポーツ」、「観光名所・世界遺産」、「暮らし」などとつながっている。

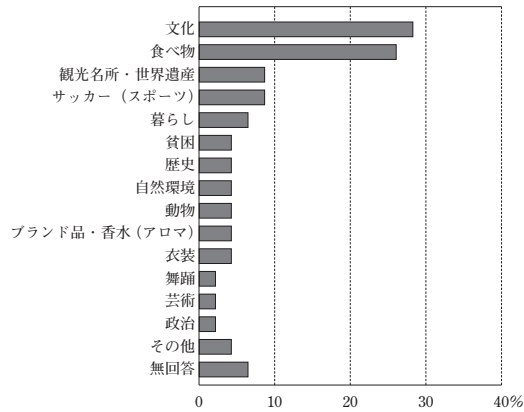
(3) 「アジアシリーズ」の良い点と悪い点の自由記述

アンケートの最後では、「アジアシリーズ」の良いと思う点と悪いと思う点（改善してもらいたいこと）を児童に自由に書いてもらった。ここでも回答は多岐にわたっているが、大きく14項目に大別してグラフ化した¹²⁾。その結果が図表23に示されている。

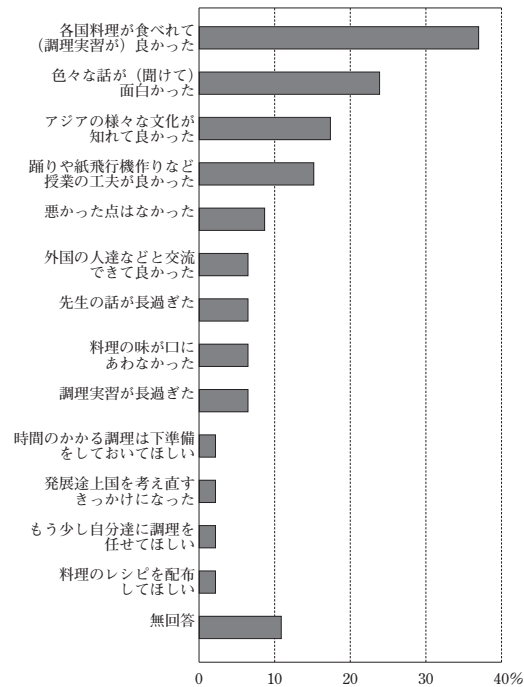
良い点として挙げられたのは、回答率の高い順番に「各国料理が食べれて（調理実習が）良かった」（回答率37.0%）、「色々な話が（聞けて）面白かった」（同23.9%）、「アジアの様々な文化が知れて良かった」（同17.4%）、「踊りや紙飛行機作りなど授業の工夫が良かった」（同15.2%）、「外国の人達などと交流できて良かった」（同6.5%）、「発展途上国を考え直すきっかけになった」（同2.2%）となっている。

逆に悪い点として挙げられたのは、「先生の話が長過ぎた」（回答率6.5%）、「調理実

図表22 今後、話を聞いてみたい事柄
(複数回答・回答率)



図表23 「アジアシリーズ」の長短所
(複数回答・回答率)



12) 回答総数は41であった。無回答は5であった。

習が長過ぎた」(同6.5%)、「料理の味が口に合わなかった」(同6.5%)、「時間のかかる調理は下準備をしておいてほしい」(同2.2%)、「もう少し自分達に調理を任せてほしい」(同2.2%)、「料理のレシピを配布してほしい」(同2.2%)となっている。

なお、「悪かった点はなかった」は回答率8.7%、「無回答」は10.9%であった。

おわりに——まとめにかえて

岡上小学校と和光大学は直線距離にして約1.5km、徒歩で約15分ほどの距離にある。それぞれの住所は神奈川県川崎市と東京都町田市に分かれている。今回、近隣にありながらこれまで協力関係が薄かった両校が協同して児童向け国際理解教育プログラムを実施したことは、プログラムに携わった関係者および地域開発モデル研究会メンバーに多くの示唆を与えてくれた。

本稿では、「アジアシリーズ」に参加した児童への教育効果や児童からの感想を中心に記述したが、その教育効果は双方向的なものであったことを指摘しておきたい。和光大学が一方的に児童向けの授業を提供しているといった見方は表層的である。双方にとってメリットは大きかった。

まず、大学生が小学校での授業に参加して児童と接する機会を持ったことで大いに刺激を受けた。大学生が(小学生児童に対して)指導的な立場に立つことで、自らを律する訓練を積んだことは間違いない。とりもなおさず教職課程の学生にとっては生きた学習の時間となっている。ついで、留学生らにとっては日本の小学校の日常を知る、またとない貴重な機会となっている。授業後に児童らと一緒に給食を共にして、身近な話題で話をするなど双方にとって生き生きとした国際文化理解の機会が生まれている。草の根の国際交流ともいえよう。また、授業を保護者の方へも開放しているので、授業参観に訪れている児童の保護者にとっても生涯学習の一環としての位置づけがなされるかもしれない。児童が保護者へ「アジアシリーズ」のことを話題に上げることが多いといったアンケート結果から一家団欒にも寄与しているといえよう。

上記のような多様な教育効果を持つ地元小学校と連携した児童向け教育プログラムは、今後の大学が果たすべき(地域)社会貢献に関する1つのロールモデルとなり得るかもしれない。本来、大学に求められる機能は教育と研究である。それに昨今は第三の柱として地域貢献が加わっている。大学の持つ知的財産を地域に対して開放していくことが求められている。それは、大学を地域の知的貢献の拠点として捉え直すことにつながっている。具体的には、大学の持つ人材を地域交流や国際交流に活用する、地域行事やボランティア活動へ参加する、大学の各部署が講演会やコンサートなどの市民開放型の文化的催事を実施する、生涯学習の機会を提供する、など様々な形があり得る。その一つとして、大学の持つ知財

を地域の学校へ貸し出しすることで地域貢献を実施することが有効である。このことは、今回の「アジアシリーズ」の実践が示しているように思える。そして、大学に所属する研究者および協力者が自らのフィールド（研究対象・研究対象地域）を紹介することは、研究成果の社会還元策としても有望といえるであろう。地域開発モデル研究会としては、今後益々同様の教育プログラムを地域の学校と連携して行い、成果の蓄積を重ねて、そのあるべき姿を探っていきたい。

次回の研究報告では、もう一つの教育プログラムである「縄文シリーズ」についても、その詳細をお伝えしたい。

[かとう いわお／Bambang Rudyanto／かたおか よしのぶ]